

LC-1A

↓こちらは改良型でよりワイドレンジな特性になっている。初期型と基本的な構造、素材は同じだが、ウーファのエッジが動きやすい布製になり、イコライザーの役目をかねた橋脚の山が7個装着されている。また指向性の改善のためにトウイーターの中心に金属製の羽が追加された。初期型との再生音での大きな違いは低域の量感がより豊かになったことで、この1AタイプからLC-1 Systemよりひと回り小さい家具調のデザインの箱のシステムが何種類か追加されるようになり、当時のハイエンドユーザーの家庭などにも導入されていたようだ。市場価格は40～50万円/ペア



LC-1

↑このユニットはオルソン博士が38cm口径の同軸2ウェイユニットの1号機として開発したものの。ウーファーもトウイーターも磁気回路が別々の同じコーンタイプのユニットで構成されていることで、音のつながりが同じ紙素材のため、違和感なく、まるでシングルコーンのような鳴り方をするのが特徴。強力な磁気回路で固く厚みのあるコーン紙のウーファーと、極めて薄い紙のコーントウイーターからは、とてもナチュラルでレンジの広いダイナミックな再生音が繰り出される。特にウーファの完成度が高く、最近の録音ソースの低音再生にも十分反応してくれる。とても、60年以上前に開発されたユニットとは思えないほどだ。市場価格は40～45万円/ペア

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュ等が誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第5回 RCA vol.1

RCAのフルネームはRadio Corporation of Americaでニューヨークを本拠地としていた会社。有名なWestern Electric などと同じように1920年代頃からシアターサウンドを中心とした音響開発に携わり、西のWestern Electric、東のRCAでその後に勢力を全米で争っていた時期もあったようだ。主にWestern Electricはシアターサウンドに力を注いでいたが、RCAはLPレコードが開発された1948年代頃から、ラジオ局を中心とした放送分野、レコードメーカーとしての分野にも積極的に進出するようになる。そしてその当初から開発に電機音響工学博士のハリー・オルソン氏が携わっていたことも有名で、多くの功績を残している。また、現在でもよく使われているRCAピンジャックやRCAマイクなどは同社が開発した機材で、そのまま呼び名になっている。

本文 / 田中伊佐資

キャプション / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 君嶋寛慶

LC-1 System

1946年に発表されたLC-1を搭載したスピーカーシステムで、初期型と後期型があり、後期型には改良型のLC-1Aが搭載されている。当時流行っていたアールデコ調と近未来的なデザインがマッチした奇抜な外觀が目玉。1947年頃、ボストン交響楽団の生演奏とLC-1システムを12台使って再生した音の差をブラインド試聴テストしたとき、その場のほとんどの人がいつ生演奏と録音を切り替えたか気がつかなかったことで有名になったようだ。主に録音スタジオや、ラジオステーション、小ホールなどで使われていた。日本でもNHKなど多くの放送局のスタジオにも投入されていたようだ。市場価格は80～95万円/ペア



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

MI-12188

↓1930～40年代はRCAとWestern Electric社との間で映画館機材の設置で盛んに勢力争いが行われていた。その1940年代の初め頃に開発されたシアターアンプ。出力管には6L6とほぼ同規格でトッププレートタイプの807が4本使われており、70W出力となっている。数あるRCAのシアターアンプの中でも群を抜いてトルクの強力なパワーアンプで、東海岸のメーカーらしく滑らかで音場感に富み、そして明快で分厚いサウンドは西海岸のメーカーにはない魅力を持っている。RCAの機器はこの型番の頭にMIという型式が付くものはすべて、プロフェッショナルユースのモデルとなっていて、先述のスピーカーユニットLC-1はMI-11411、LC-1AはMI-11411-A、BA-14AはMI-11234、BA-4CはMI-11223という業務型番を持ち、一般機器とはラインが分けられていた。市場価格は35～45万円/ペア



BA-14A

↑オルソン博士がLC-1A Systemのモニターアンプとして開発したパワーアンプ。出力管にはRCAが最初に開発したといわれているメタル管の6L6(1622)が2本使われ、出力が12Wで音質を重視したA級動作で設計されている。小出力ながら力のあるアンプで、モニターアンプらしい繊細で中域の情報量に富んだ特性となっている。このアンプの後面には左右8個の平行ピンが出ており、本来は縦型の大きなラックにビルトインされて設置されていた。また、このモデルの初期型でBA-4Cという型番のアンプがあり、同じ12W出力で回路設計も使われている真空管もほぼ同じ仕様となっている。2台のアンプの音質の差はほとんどないが、若干後期型になるBA-14Aの方がワイドレンジな特性になっているようだ。市場価格は45～55万円/ペア

RCA

vol.1

リラックスするのもありだよと
RCAサウンドが諭してくれた

「きょうはRCAでいきます」
「アトリエJe-tee」の店主、岡田圭司さんは本日も颯爽と発表した。RCAといわれて、はたと思いつくのはソニー・ロリンズの『橋』だ。RCA時代のロリンズはぼつとしなかったが、これだけは、目をかけて愛聴している。「RCAはその名の通りRCA端子の規格を作った巨大企業なんですよ」知らなかった。それはすごい。とんちんかんな連想はここで姿を消し、機器への絶大な信頼感が深まった。真空管の真っ赤なロゴが、往時のグレートなアメリカを象徴するように輝いている。

すでに設置しているスピーカー、LC-1システムもグレート感がみなぎっている。これがミッドセンチュリーと呼ばれる造形なのだろうか。時は50年代、こつてり甘いアイスクリームを1ダースも仕込んだ冷蔵庫のようだ。岡田さんはフロリダの富豪からようやく入手できたという。

このスピーカーを使って、やはりRCAの真空管アンプ2台を聴き比べることになった。どちらもプロフェッショナル・モデルである。コンシューマー機をここでこつちやに出すのは拙速かつもつたないの、それらは次回にまわすことにした。

このボーカルがもの見事に重厚でしなやか。話ができすぎのようだが、映画館のセリフのような安定感がある。あの映画館ならではの、たつぷりとしたトーンがそつくりそのまま出てくる。あったかい布団にくるまったような安堵感でいっぱいになる。

後攻のアンプはBA-14A。LC-1Aの生みの親オルソン博士が、せっかくだからスピーカーにマッチしたアンプを作ろうということで開発した。こちらの出力は、シアター用の5分の1以下しかない。だが、実際のところこの数字はまるで関係なかった。もつと優生派的で、細かい音を拾う。採寸までした特注ハンドメイド手袋のようにスピーカーとじっくりマッチしている感じがする。ならばMI-12188は、じっくり使い込んだ野球のミットか。

クラシックのピアノソロ、さらにロックではイーグルスまでもかけたが、あのままその印象は変わらない。両機に共通しているのは、音が冴えているのにまるで聴き疲れをしないということ。ひねもす聴いていたのか、そうではないのか。こつちは気持ちよくなつてうつつらうつらしてきた。

細事にびりびりこだわるオーディオもいけれど、どつぷりリラックスするのもありだよと上質なRCAサウンドが諭してくれた。